

26. ジブラルタル海峡

次は遠く離れた地中海の出入口ジブラルタル海峡です。そんな遠くは我が国とは直接的関係はないだろうお思いかもしれませんが、我が国関連の船舶が多数通過しているのです。

ヨーロッパへのコンテナや自動車は全てここを通過していきます。揚港はオランダのロッテルダム、ユーロポー



①

ト、ベルギーのアントウェルペン、ドイツのハンブルクが主な揚げ地で地中海内での揚げはほとんどありません。これはヨーロッパ各地への道路、鉄道、運河網がこれらの港を拠点としているからです。ロッテルダム港は世界の貨物取扱量でしたが近年躍進著しい上海とシンガポールに抜かれ、世界三位になりました。ヨーロッパだけに限定しますと一位ロッテルダム、二位アントウェルペン、三位ハンブルクの順です。ライン川の河口を巧みに利用して造られたロッテルダム港は素晴らしく、岸壁の傍を路面電車が走っていて港と街が一体になって便利この上もない美しい街です。

私ども船乗りが安心できるのはライン川を朔上したところの港ですから外海の影響は全く受けないので気象の変化にそれほど敏感にならなくて済むので、1晩位の小旅行を楽しむことができ、第二次大戦の激戦地カレー海岸、アルデンヌの森、ナチスの開発した兵器博物館等見所は盛沢山です。我が国のように嫌な思い出は全て消し去ってしまいたいものに対しヨーロッパの人達は後世に伝えようと大切に保存しております。これは建物にも表われ、爆撃や戦場になって壊滅的な破壊を受けたはずなのに美しい中世の街並みになっているのを見て、もしかして第二次大戦はなかったのかもしれないとまで思うくらいでした。

現地の年輩者に聴くと個人での再建を認めず、街全体の景観から中世の街並みを再現するように厳しい指導があったのだそうです。街の中心には必ず教会がありますが、荘厳なゴシック建築で中世を表わしています。これは破壊された破片を拾い集め、たりない部分は全て手作りで再現したのだそうですから感激です。驚くべき事はオランダやベルギーはナチスドイツに侵略され、大変な被害を受けながらも敵性ナチスの兵器を大切に扱い展示しているのですから驚きました。お陰で諸所見学でき写真でしか見たことのないこれらの兵器に触ることもでき、ティガー戦車の中にも入ることが出来のですから感激ひとしおで充分に堪能出来ました。さらにはドイツのブレーメルハーフェンではUボートの本物が展示されており内部を見学できるのでですからこれ以上の感激はありませんでした。

ジブラルタル海峡に戻ります。ヨーロッパのイベリヤ半島の南西端とアフリカの北西端を

隔てる海峡で大西洋と地中海の境をなしております。イベリヤ半島にあるジブラルタルの岩山と北アフリカ側のスペイン領セウタにあるアビラ山の二つがヘラクレスの柱です。

この間は僅か 14km しかなく、この中間を航過するのですから両岸が肉眼でもハッキリと望見できます。イベリヤ半島の岬の内側に地中海に細く長く岩山が突き出している岬が石灰岩で出来た「ザ・ロック」と呼ばれる岩山で最高峰が 426m、西側は垂直に近い岩肌がむき出しの断崖絶壁、文字通り屏風岩で東側がやや傾斜があり木もあります。

この突き出た屏風岩が絶好の防波堤になり囲まれた湾は、地中海の関所として睨みを効かすのは最高のロケーションでスペインの領地なのですがイギリスの軍隊が駐留する海外領土になっております。そして対岸のアフリカ側はモロッコ王国ですが、スペイン領セウタとなりますから大国のエゴは未だ続いております。



②

このジブラルタル港は天然の良港でイギリス海軍の基地になっており、第二次大戦の初頭、ナチスドイツの電撃戦に破れたフランスは降伏し、親ナチ政権であるビシー政府が発足、フランス艦隊は一度も戦わずに降伏となり進退窮まり、基地ツーロンに艦隊が集結していたところ、昨日まで同盟であったイギリス空軍機が突如襲いかかって無抵抗のフランス艦隊を攻撃、またナチスドイツの接收を怖れた海軍当局は自沈を命令、77 隻の軍艦が攻撃による沈没、又は自沈という「ツーロンの悲劇」がありました。その出撃基地はジブラルタルです。

また大戦中期「砂漠の狐」と恐れられたロンメル將軍率いるドイツ機甲師団の活躍を封じ、リビア砂漠のベンガジで壊滅させたのも、補給路を断ったイギリス海軍の海上封鎖があったからで、海軍が縦横に活動できたのはジブラルタル基地のお陰です。

ジブラルタルの街は現在でも基地の街で住人の 7 割は軍関係者、従って通常のような経済活動がないので一般商船が寄港することはほとんどありません。ただ私は 2 度寄港したことがあります。1 度はバンカー（補油）のため、もう一度は船上での事故で死者が出たため死体検案で解剖に立ち会わされました。その後遺体は貨物便で故国（韓国）へ空輸され空港まで見送りに行ったのです。空港は屏風岩の半島ですから岩の麓で半島の付け根部分にスペインとの国境に沿って東側の海岸の端から西側の海岸迄は約 1000m、それではたりないので滑走分だけ埋めたてて約 800m、辛うじて 1 本の滑走路があり、その滑走路のど真ん中を幹線道路が横断しているのです。勿論離着時には交通は遮断はされるので遮断機、信号機、係員が配置されており、自動車、自転車、歩行者が待っている電車の踏切と変わらない風景でしたが、初めて見る者にとっては仰天の光景でした。これもローカル空港だから出来ることであって成田や羽田では不可能事です。しかし旅客機は定時運行ですから交通遮断も可能でしょうが、この空港は軍と併用しているのでスクランブルで戦闘機が緊急発進する場合は交通遮

断が間に合うのか余計な心配をしてしまいました。

スペイン国土の一部に位置するイギリスの海外領土ですから当然返還を求めて長年交渉が行われておりますが、イギリスはこれを拒否、イギリス女王に任命されたジブラルタル総督のもと 僅か2万8千の人口ですが自治が許されており、さらにはシンガポールのような都市国家を目指し独立運動まで起きています。

なにしろ地中海の関所たる戦略上の重要拠点でイギリス海軍の基地がありますから返還には応じないでしょう。

イギリスが海外領土とした経緯は1701年イスパニア継承戦争に参戦したイギリスはイスパニアを破り、1704年ジブラルタルを占拠したのが始まりで、それ以来海外領土として居座っているわけです。

この周辺は地中海の最重要地点として歴史を見れば一目瞭然 常に争奪の場になっております。古くはポエニ戦役でのローマ帝国とカルタゴの闘い、西ゴート王国の支配、その後はムーア人の侵略によりイスラム圏になり、されにはキリスト教徒による反撃、奪取。近世になるとオランダ艦隊、スペイン艦隊、イギリス艦隊が制海権を賭けて激しい海戦を繰り返しております。特に有名なのはトラヒルガル沖海戦ですが、海峡の外側で北欧へ向かう船は舵をスターポート（右転）にしてまもなくの海峡と直ぐの海域です。陸上での戦闘は道路が山峡になった点、関ヶ原の戦いや山崎の合戦がその例で、敵は必ずこの路を通るから待ち伏せするには最適の場所です。同じように艦隊も必ず海峡を通りますからそれを待ち構えていれば必ず遭遇するので最適の海域になります。特に索敵能力や通信連絡手段がなかった時代であればなおさらのことです。日露戦争でバルチック艦隊がどの海峡を通過しようとしているのか、（対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡）参謀の間で激論になったとき、東郷司令長官が一言「対馬海峡」、これによって全連合艦隊が集結して待ちかまえていたわけです。その時の監視船信濃丸が発した無線通信は第5話で述べました。

第二次大戦でもジブラルタルは最重要基地となり、地中海アフリカの大半はナチスドイツに占領されており、連合軍の反撃とされているノルマンデー上陸作戦ばかりが有名ですが、連合軍による反撃の第一打は北アフリカのモロッコとアルジェリアへの同時上陸でこれがトーチ作戦、この最初の反撃作戦で大船団が出撃したのがジブラルタルです。

第二次大戦後の冷戦時代、ジブラルタル基地のイギリス艦隊、イタリア・ガエータを基地としたアメリカ海軍第六艦隊が地中海に睨みを効かせソ連（当時）の黒海艦隊を封じ込んでいたのです。更にもう一つ、リビアのカダヒィ大佐を見張る第六艦隊はシドラ湾の沖合を哨戒、遊弋しており、午前8時に空母より哨戒機が発艦します。そうするとスエズ運河を通過した第一船列は午後8時頃地中海に出て翌朝この海域に達するので、猛烈な勢いで風上に向かって突っ走る空母に出会うのです。機の発艦には風上に向かって全速航走（33ノット位）で直進ですから、国際法の海上衝突予防法は完全に無視した艦隊行動最優先が国際ルールで

す。ですから哨戒している駆逐艦から VHF で避航を要請されます。毎度この場面に遭遇しますからさっさと迂回又は避航します。もう一つ加えると確実な情報に基づいてこの空母を発艦した戦闘爆撃機がトリポリ近郊のカダヒィ大佐の寝所にミサイルを撃ち込んだ事件がありました。この時は事前に察して避難したため助かりましたが、家族は犠牲になったようです。毎晩秘密裏に寝所を換えているのだそうで独裁者も大変です。

平和日本で暮らしていると全世界も平和であると思いがちですが、世界中流動的、何時何が起きても不思議ではないギリギリの線上にいるようなもので、同じように日本近海も危険を孕んだ暗雲が漂う危険な海域なのです。

以前たまたま帰国したときあまりにも平和ボケしている日本人に違和感を覚えました。帰国して全く別な仕事に従事してもう十数年になると危機感をなにも感じなくなりましたから不思議です。

写真解説

- ① ジブラルタル海峡、ザ・ロックの屏風岩（426m）が聳えており、これが史上名高いヘラクレスの柱の一つで、何世紀もの間歴史を見守ってきました。
- ② 毎回通過だけでしたが、珍しくジブラルタル港に寄航するため近づいているところです。港は国際港としては小さいですが、この陰に大きな湾があり、そこがイギリス艦隊の根拠地になっております。

